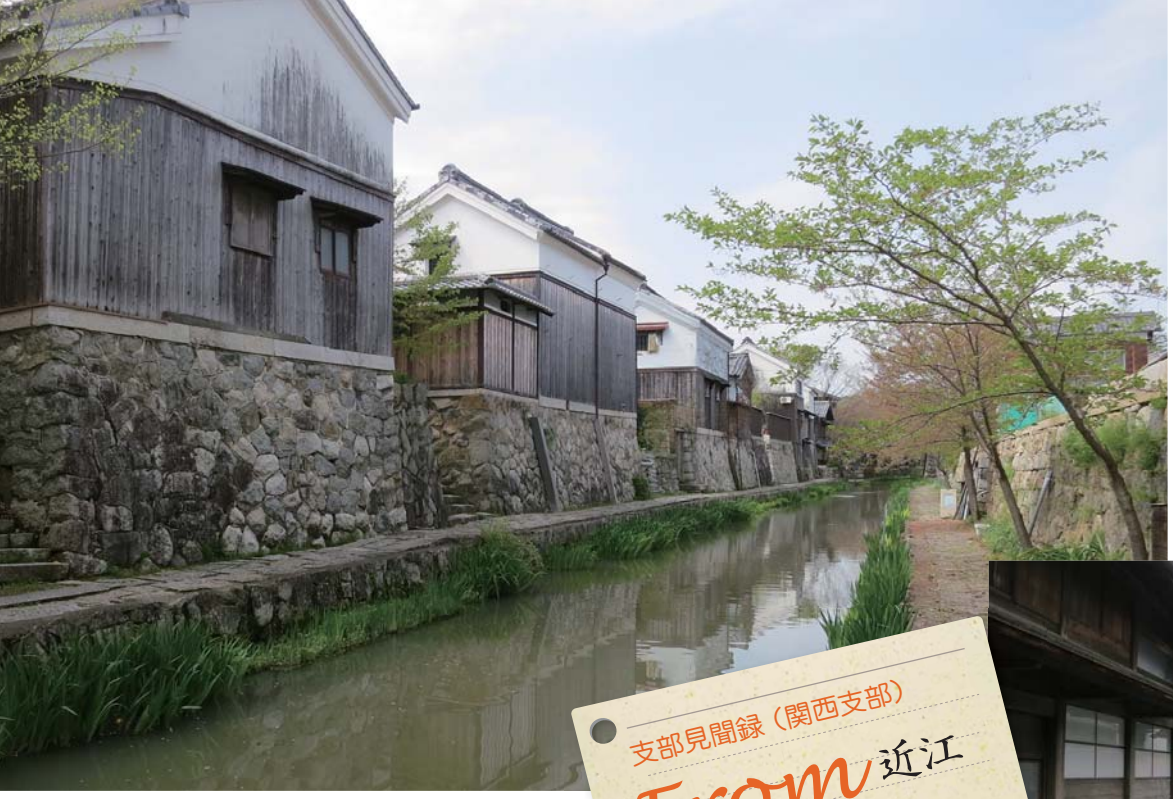


◀琵琶湖と近江八幡を結ぶ八幡堀。水運を担い、近江商人の活動を支えた。

▲近江八幡の町は、1585年に城下町として開かれ、その後商業都市として栄えた。旧市街には近江商人たちの本宅だった家々が立ち並び、往事の繁栄を伝える。

支部見聞録（関西支部）
From 近江

琵琶湖の南東、近江商人のふるさとへ

江戸時代を中心に、全国的規模で活動し、時には海外へも進出した「近江商人」。伊藤忠商事や丸紅、西川産業、東洋紡など今に残る老舗企業を輩出しただけでなく、CSRの源流といわれる「三方よし」といった商いの哲学を生み出すなど、現在に遺す影響は大きい。近江商人の揺り籠となり、本拠地でもあった琵琶湖東岸地域のまちへ。近江商人の足取りとその遺産を訪ねよう。

商社的な商いで経済を活性化した近江商人

「近江商人のふるさと」といわれる近江八幡や五個荘を訪れると、タイムスリップしたような不思議な気分に襲われる。簡素な中に洗練された意匠を見せる旧西川家住宅や豪壮な旧伴家住宅をはじめ、近江商人の興隆をしのばせる家々が軒を連ね、八幡堀のほとりに蔵が立ち並ぶ近江八幡。のどかな農村地帯に白壁に船板張りの土蔵が続く町並みが形成され、いくつもの豪商の邸宅が公開されている五個荘・金堂地区――。どちらも重要伝統的建造物群保存地区に指定され、風情豊かな景観を形づくっている。

近江商人とは、江戸時代を中心に出身地近江に本拠をおいて他国で商いをした人たちをいう。多くは自ら天秤棒をかつぎ、地元の産品を他国へ行商することからキャリアをスタートし、行商先の産品を仕入れて帰途も商売する「持ち下り商い」で利を生み出した。単にものを売って金を持ち帰るのではなく、産品を買うことで行商先の地域経済も潤し、歓迎される存在として地歩を築いていく。顧客が増えれば規模を拡大し、やがては支店を出すという仕組みだ。

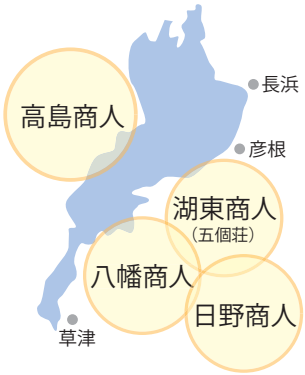
「支店の数が増えてくると、例えば五個荘産の麻製品を山形で売り、山形で染料の紅花を仕入れて京で売り、京で呉服を仕入れてさらに別の場所で売るといった『諸国産物まわし』という今でいえば商社のような商売を行いました」と、五個荘にある東近江市 近江商人博物館の学芸員、林純さんはいう。

近江商人を輩出した地は、琵琶湖の西北地域の高島などの例外はあるが、南東地域が大半。特に八幡、日野、五個荘に集中し、江戸時代開幕前後から八幡、続いて日野、江戸の後期からは五個荘を中心に愛知川流域一帯での商業活動が活発になっていく。江戸や京、大坂はもちろんのこと、盛岡や甲府、足利といった地方都市、九州や北海道までその活動は全国に及んだ。その中から当時としては世界最高水準の複式簿記や、宿と特約を結んで行商の宿泊だけでなく書状や金銭、商品の中継を扱わせる日野の「日野大当番仲間」制度、共同出資で事業を進める「乗り合い商い」など、先進的な取り組みが生まれていった。

受け継がれ、現代に生きる「理念」

それにしてもなぜ、この地にこれほどまでの活躍を見せた商人群が生まれたのだろうか。多くの説が出ているが、林さんによれば、京に近く交通の要衝にあり、安土桃山時代に楽市楽座の振興策がとられて、八幡や日野など当時の城下町を中心に商業の素地が築かれていたこと。さらに歴史的な事情から、この地には彦根藩の領地や天領（幕府領）に大名・旗本領の小さな飛び地が細切れ状態で混在していたことが大きな要因として挙げられるという。時には普段の生活圏がいくつもの領地にまたがるケースもあって、他所との行き来に対して寛容な土壌があった。特に飛

協力／東近江市 近江商人博物館、一般社団法人 東近江市観光協会、近江八幡市立資料館



▲もっとも早く戦国末期から活躍した高島商人。それ以外の近江商人の大半は琵琶湖の南東地域から輩出している。

◀近江商人の原点、天秤棒を担いだ行商姿（東近江市 近江商人博物館）。大商人への道もここから始まった。

▲上／近江八幡の豪商、旧伴家の豪壮な建物。右／近江八幡、旧西川家展示。書かれているのは家訓で、理をわきまえた商売と社会貢献の大切さを説いている。

◀1877年、八幡商人たちの寄付によって学校として建てられた白雲館。

び地内では統制も緩く、普通なら移動を厳しく統制される農民でも、副業として他国への行商を営むことが長年当たり前のように行われていた。

八幡や日野はともかく、五個荘を含めて愛知川流域の商人たちは、身分としては農民に属している。どんな大商人になっても必ず出身地に本拠を置いていた陰には、農民身分ゆえに他所には移れないという事情もあったのだ。行商から身を起こして商売を広げ、地元に立派な邸宅を構える、あるいは商家本宅への丁稚奉公（近江商人は奉公人を地元からのみ採用した）から始めて出店の番頭や支配人にまで出世し、時には独立を許される――。地元の子どもや若い世代がそんな「成功モデル」に身近に接する環境があったからこそ、次々に商人を志す者が現れて成功者が生まれ、それがまた次代への呼び水となる。商人たちは見込みのある若者には出資や助力などの後押しにも積極的で、続々近江商人を生み出す風土がこの地には形づくられていった。

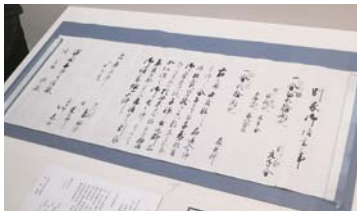
近江商人という存在は、有形無形の様々な遺産を今に遺しているが、最大のものは商いを通じて培った哲学や理念だろう。質素・倹約・勤勉・堅実を心がけ、誠実な商売で信頼を得るといった、他所の商人たちも掲げる普遍的な指針も多いが、特長的なのは、「利他」や「社会貢献」を強く打ち出していることだ。有名な「売りに手よし、買いに手よし、世間によし」（売り手だけでなく買い手が満足できる商売をし、社会に貢献しなければいけない）の「三方よし」は、そんな近江商人の理念をよく表している。近江商人のようによそ者が他国で経済活動をすることは、抵抗感や反発を招きやすい。商売だから利を得るのは当然だが、相手にも喜ばれる商売をし、地域経済の活性化に役立ち、利益を還元して社会貢献することで地域に受け入れてもらう。その重要性を近江商人は早くから体得していた。現実に、治山治水や橋や道路の建設、貧民救済、学校の創設や寄付などが盛んに行われている。商売のためにそうするというのではなく、長い年月の間に『おかげさま』の精神のもと、近江商人の血肉となっていったのだと林さんはいう。

「近江商人のあり方や理念には、国内にこれといった資源もなく、才覚と勤勉さを武器に世界に出て商売をしてきた、近代日本のビジネスに通じるものがあるのではないでしょうか」。

近江商人は蓄えた財力とノウハウで、明治維新後の初期近代経済活動の中でも大きな役割を果たした。誰もが自由に移動や商売ができる時代が訪れ、近江商人としての存在感は次第に薄れていったが、一方、近江にルーツをもつ数々の企業が、確固たる足取りで今も歴史を刻み続けている。その事実と昨今CSRの先駆けとして「三方よし」が脚光を浴びていることが、近江商人が遺した理念の価値を、何より雄弁に物語っている。

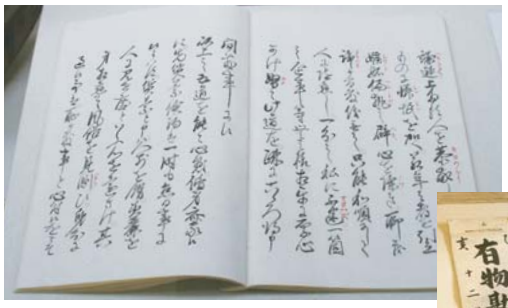
▲五個荘金堂地区では3軒の近江商人屋敷を公開。外村繁邸の土間・台所の規模の大きさに、奉公人を抱える商家の暮らしが垣間見える。

▶売掛や売上をくまなく記し、もっとも大切な帳簿だった大福帳（金堂・外村宇兵衛邸展示）。



▲別家証文（＊）。別家とは功績のあった奉公人が独立することで、家名と財産が分与された。

▲書家、高田忠周直筆の商家の家訓（＊）。



▲五個荘・外村宇兵衛家の家訓。「質素倹約はひと時も怠る事に候らはず」とある（＊）。

▼大福帳だけでなく、資産勘定を記す帳簿もあった（金堂・外村宇兵衛邸展示）。

＊印はすべて東近江市 近江商人博物館展示。

別冊 FROMはウェブサイトへ

eふぁみり もあわせてご覧ください！
http://jp.fujitsu.com/family/honbu/family/

「驚きの色、近江八幡名物の真っ赤なこんにゃく」をご紹介しています。